

主はすべてを喪失した者の祈りを顧み

その祈りを侮られなかった。

天地が滅びることはあるだろう。

しかし、あなたは永遠。(詩篇102の18、27より)

He will regard the prayer of the destitute, and will not despise their prayer.  
The earth and the heavens will perish, but you endure.

私たちが顧みてくださるお方は、その祈りを知ってくださる。祈りとはその置かれた状況が厳しいほど、それは深い悲しみや苦しみ、痛みを訴えるものとなる。だれにもわかってはもらえない、そして魂のその苦しみはだれにも分かつことができない。そのような状況にあっても、なお、そうした状況を知ってもらえてしかも、新たな力を与えられる、それは愛の神、万能の神しかいない。

魂の傷が深いほど、それは血液がからだをめぐるように、その痛みは全身に浸透していく。しかし、そこからの祈りは必ず神は顧みてくださる。

それはいかなる事態になっても、変ることのない愛の神であるから。はるか2500年以上も昔であっても、この詩の作者は、透徹したまなざしを持っていたゆえに、天地のような永遠とみえるものすら、有限であることをはっきりと自覚していた。この詩人は、それゆえに、また神の不滅の愛に関しても、同じようにはっきりと示されていたのである。

神の永遠、それは単にいつまでも存在するというのでない。その愛と、真実、さらにその万能が永遠だということである。

私たちが本当に必要なのは、そのような不滅の存在であり、そこから求める者、苦しむものに変ることなく手を差し伸べてくださる神の愛の御手なのである。

私たちが、大いなる困難に直面し、これからもその状況は相当期間続くような状況に置かれた時、かつては関心を持った人であっても、時とともに次第にその関心を失っていくであろう。

しかし、いかなる状況にあっても、またどんなに歳月を重ねようと、決して私たちが忘れることのないお方がおられる。それが神であり、キリストである。主は、いかに人知れない苦しみであっても、きっとそれを見て下さっている、一すべてを失った窮乏にあって、その叫びや祈りを聞いて下さっている神を信じ、その神の愛の御手に導かれることこそ、私たちの究極的な救いの道である。

\*\*\*\*\*

## 野草と樹木たら

カツラ(桂) 十和田湖畔 2008. 7. 29

桂という樹木の名前は、広く知られています。地名としても京都市には、桂があり、私が京都の大学に入学して数カ月下宿していたところでもあり、その桂には桂離宮があつて日本史教科書にも載っています。また、人名としても桂小五郎などが知られています。そのように、名前としては有名ですが、じっさいの桂の木を知っている人は、ごく少ないようです。



わが家の前方8キロに標高800m近い中津峰という山があり、その登山口の溪流沿いに、りっぱな多数の枝分かれした数株の大きい樹木があり、秋になるとその丸い葉は、イチョウのような美しい黄色となり、地面に落ちると付近一面に黄色の絨毯で敷きつめられたようになっていました。

それは、印象に残る樹木だったので、高校時代から知っていたのですが、何という木なのか当時はだれも知りませんでした。それが桂でした。この木は、幹のまわりが2m、高さ30mにも及ぶ堂々たる

大木となります。この写真のものも、取り囲むのに6~7人も必要になるほどの大木で、根の近くからいくつもに枝分かれした桂の木の独特の姿をしており、近づけばその力強い姿に引きつけられたものです。

野性のものは、私は、その中津峰山以外では、徳島県内では、剣山（標高1955m）の頂上に近い溪流沿いのもの、徳島と香川の県境の溪流沿いのものなどごくわずかしか見たことがないのです。

この写真の桂の大木は、十和田湖畔で見いだしたもので、ここに至るまでの道沿いにも桂の立派なものがいくつか見られました。桂という漢字のもともとの意味は、中国のモクセイを意味していたとのこと、カツラという名前そのものは日本古来からあったもので（この名前は、香りを出す、つまり 香出 カツと関連あるとも）、それを香り高いという共通点から、中国の桂の木に宛ててカツラと読むようにしたと考えられています。中国では、桂という漢字は、香り高い樹木の総称としても使われるとのこと、肉桂（シナモンのことで、日本では、ニッキとして知られています）、月桂樹（ローレル）なども、よき香りある樹木ですが、これらにも、桂の漢字が含まれています。

桂の葉を採取して数時間経つとよい香りを出しはじめ、数カ月は持続します。秋の落葉の季節にこの桂の木に近づくとそのあたりは芳香が漂っているというほかに類のない特質をもった木でもあります。

大木は、その側に立つとき、その樹木が耐えてきた数々の風雪、豪雨など厳しい試練が思われ、いかなる事態にも倒れることなく、数百年という歳月を生きてきたその力強さが伝わってきます。そばにたたずむだけでその力が伝わって来るものです。

こうした大木の不動のすがたは、私たちの心をやすものがあり、それはその樹木を長年にわたって支えてきた創造主たる神の力を感じるからです。

私が今までに、とくにそのような大木の力を感じたのは、徳島県の奥深い山域にある高丸山（たかまるやま 標高1439m）の頂上に近いところに群生するブナの大木たちでした。もう30年以上も前に初めて登ったその山で見たのですが、まっすぐにそそり立つその太い幹はただ黙っているだけで、絶えず私に語りかけて来るものを感じ、それゆえにしばし立ち尽くしたことを思い起こします。

聖書の詩篇に、「神はわが岩、大いなる岩」などとよく歌われているのは、こうした力強い樹木を創造された神の力を、岩のごときものとして感じていたのがうかがえるのです。私たちも、神に祈りをもって接することによって、そのような揺るがぬ力の一端を、日々与えられたいものです。（写真、文ともT. YOSHIMURA）